

# 山ぞいの道と信仰、伝説

あずまかいどう

## 東街道の道すじと名取川

おうしゅうかいどう

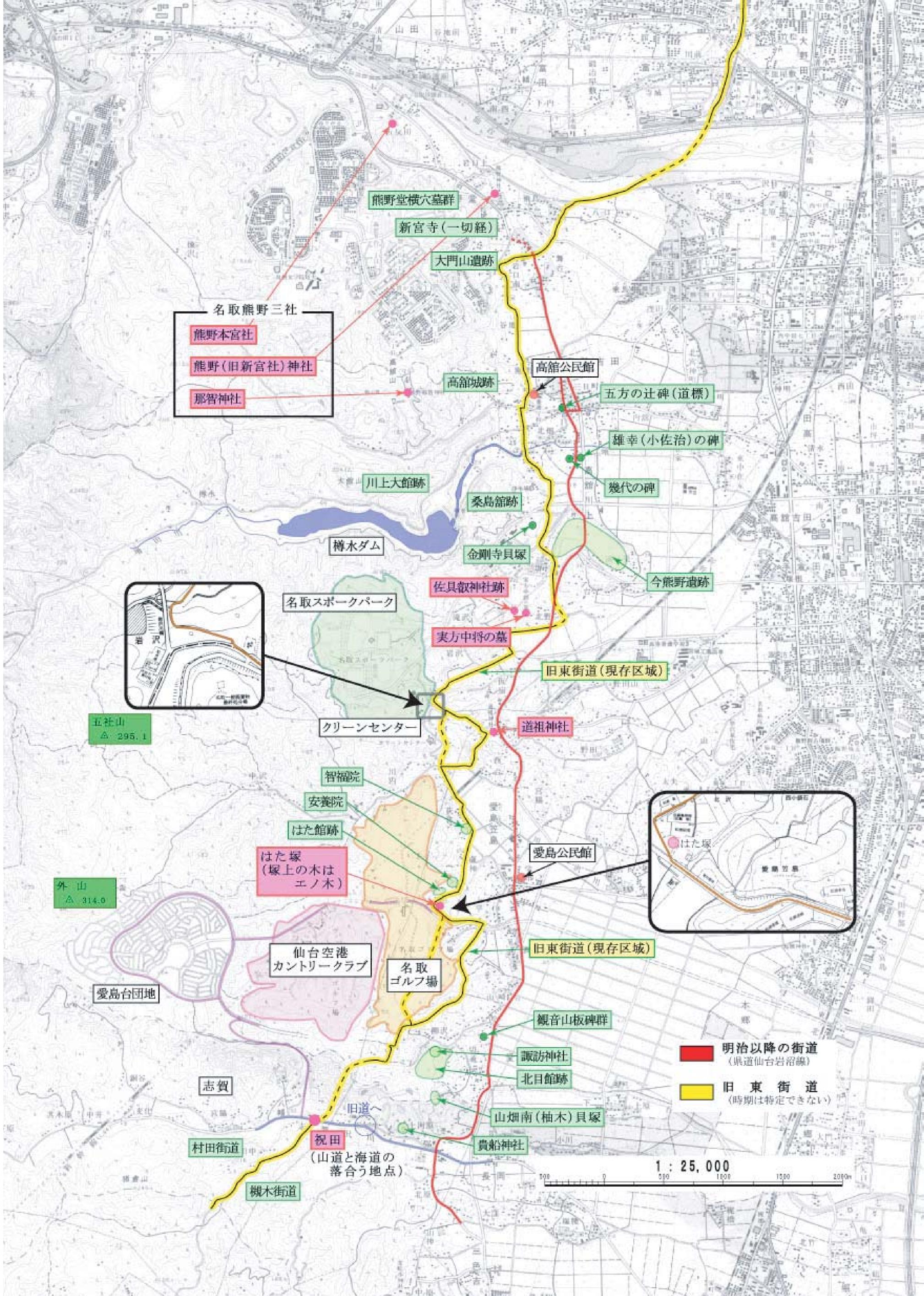
江戸時代に奥州街道(旧国道四号線)ができる前は、西方の山ぞいを通る東街道と呼ばれる古くからの道が幹線道路でした。

かんせんどうろ

この東街道が道すじを変えながら、江戸時代にも使用されたことが『奥州名所図

おうしゅうめいしょず

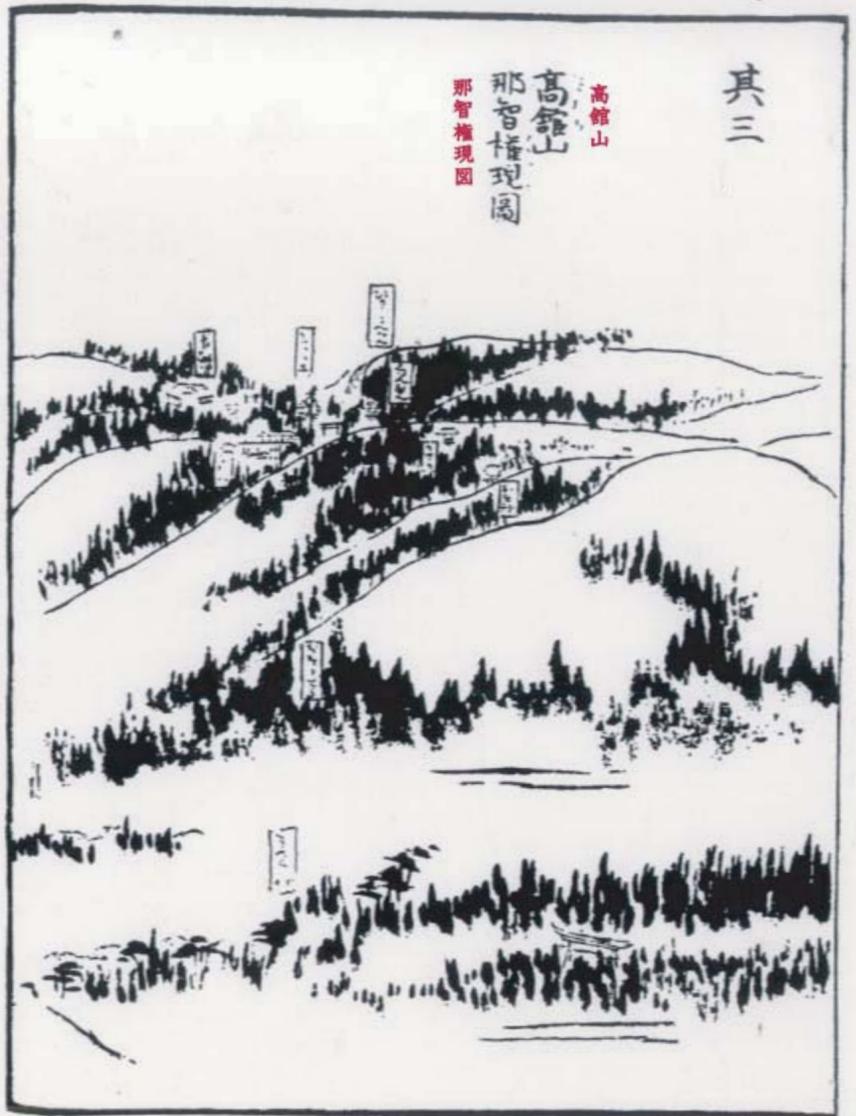
会』からわかります。それには今熊野神社前いまくまのじんじゃ前から小佐治こさじ・幾世いくよの墓、五方ごほうの辻つじを通り、熊野堂の熊野新宮社参道前から右に曲がり平野部にいたるといいう道すじが描かれています。その後は名取川の浅瀬を徒歩で渡り、仙台の大野田に向かったようです。



東街道の道すじマップ



奥州名所図会 その1  
(今熊野～小佐治・幾世の墓)



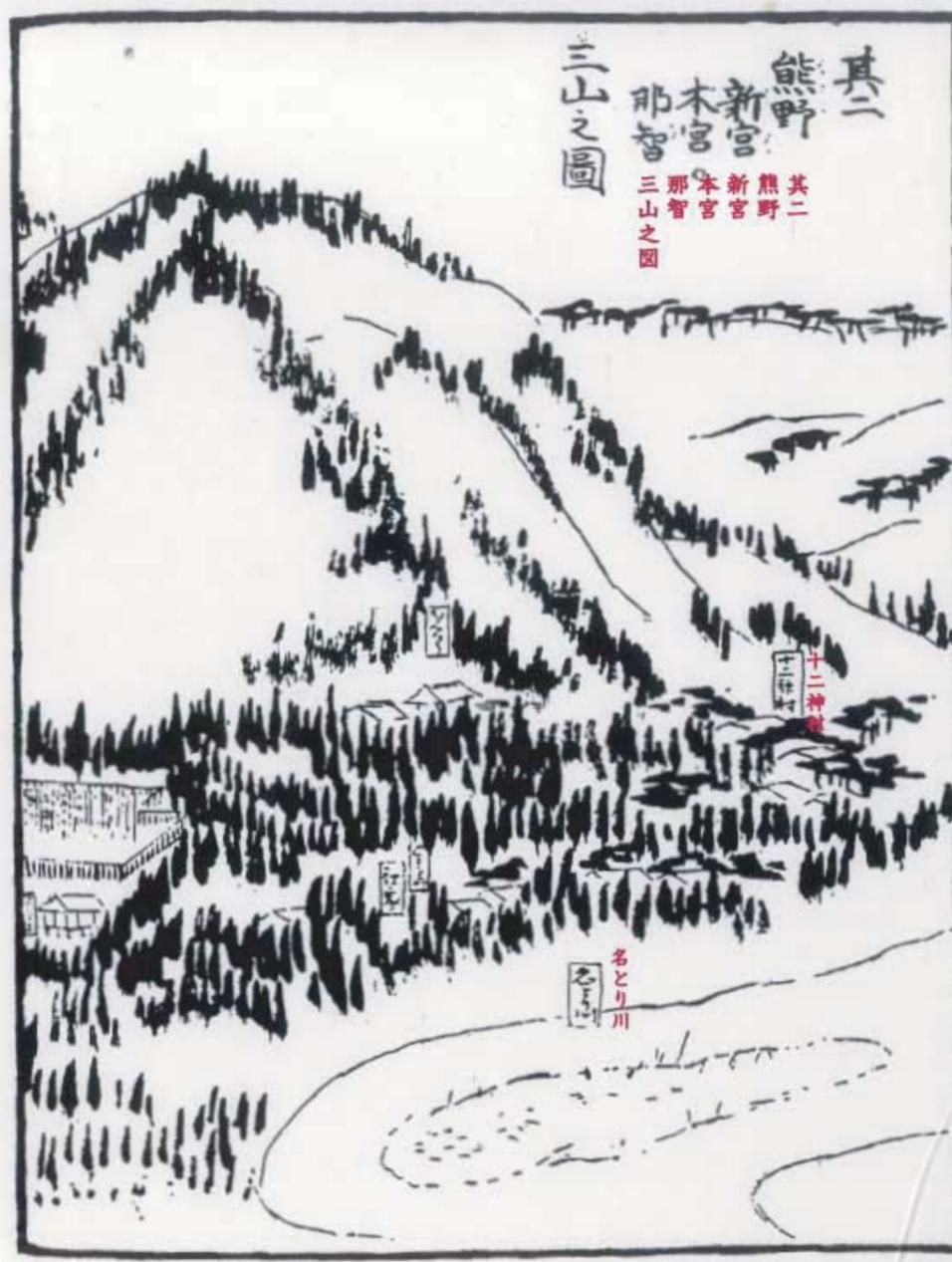
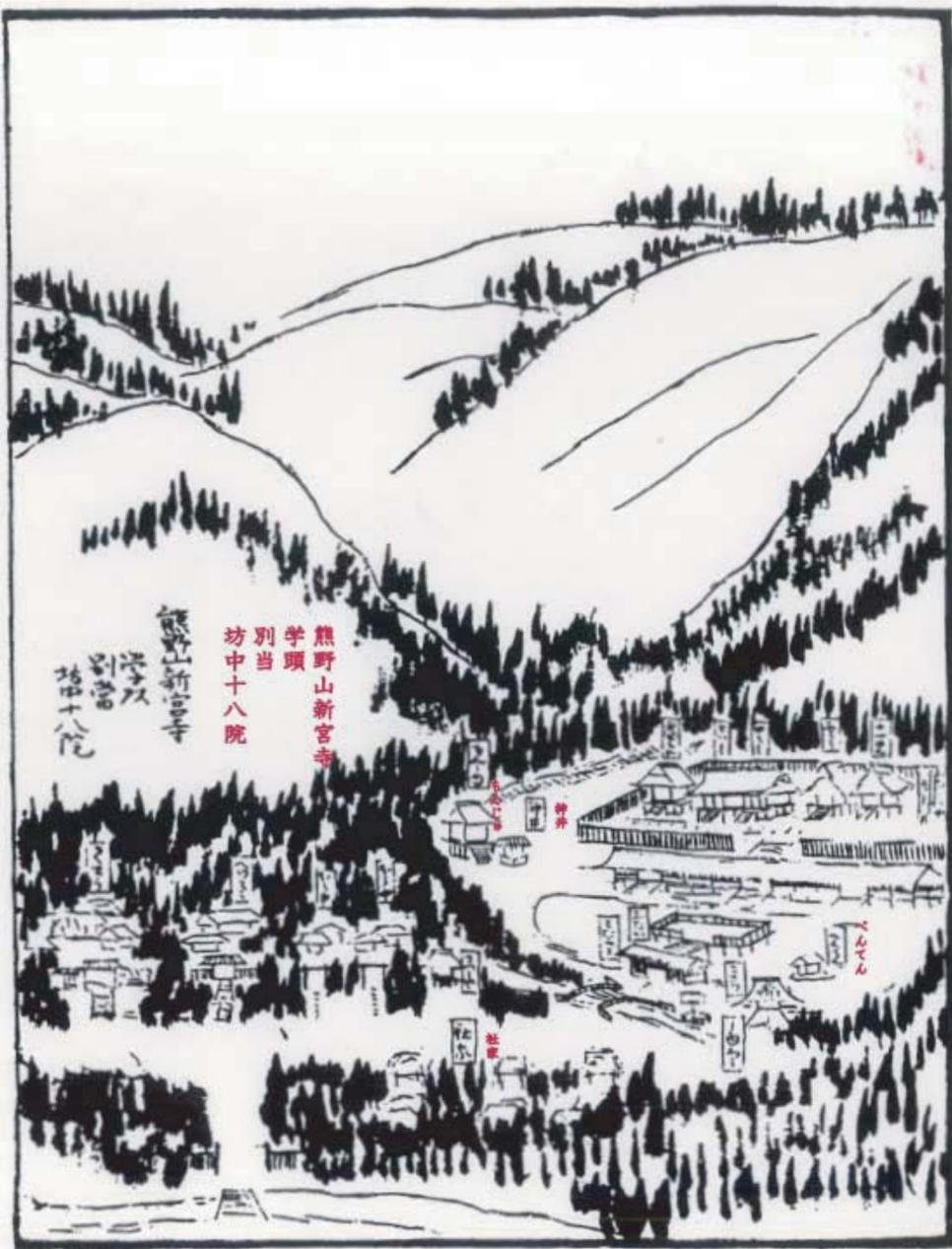
奥州名所図会 その2  
(那智神社あたり)



金剛寺付近から北を見る



秀麓斎付近を北から見る



奥州名所図会 その3  
(熊野新宮社あたり)



新宮寺付近

## 街道沿いの風景

周辺には、市場とかかわる三日町みっかまちの地名や、五方ごほうの辻碑つじひ（道標みちしるべ）、川上遺跡など、交通路との関係を示すものがいくつか知られています。また、名取川も古くは、熊野堂付近から大きく南側へ流れ、大曲おおまがり付近を通り広浦ひろうらで太平洋へ注いでいたと考えられています。これらの陸上・海上・

河川交通などを通じ、多くの人・物・情報・文化の流れがあったのでしょう。

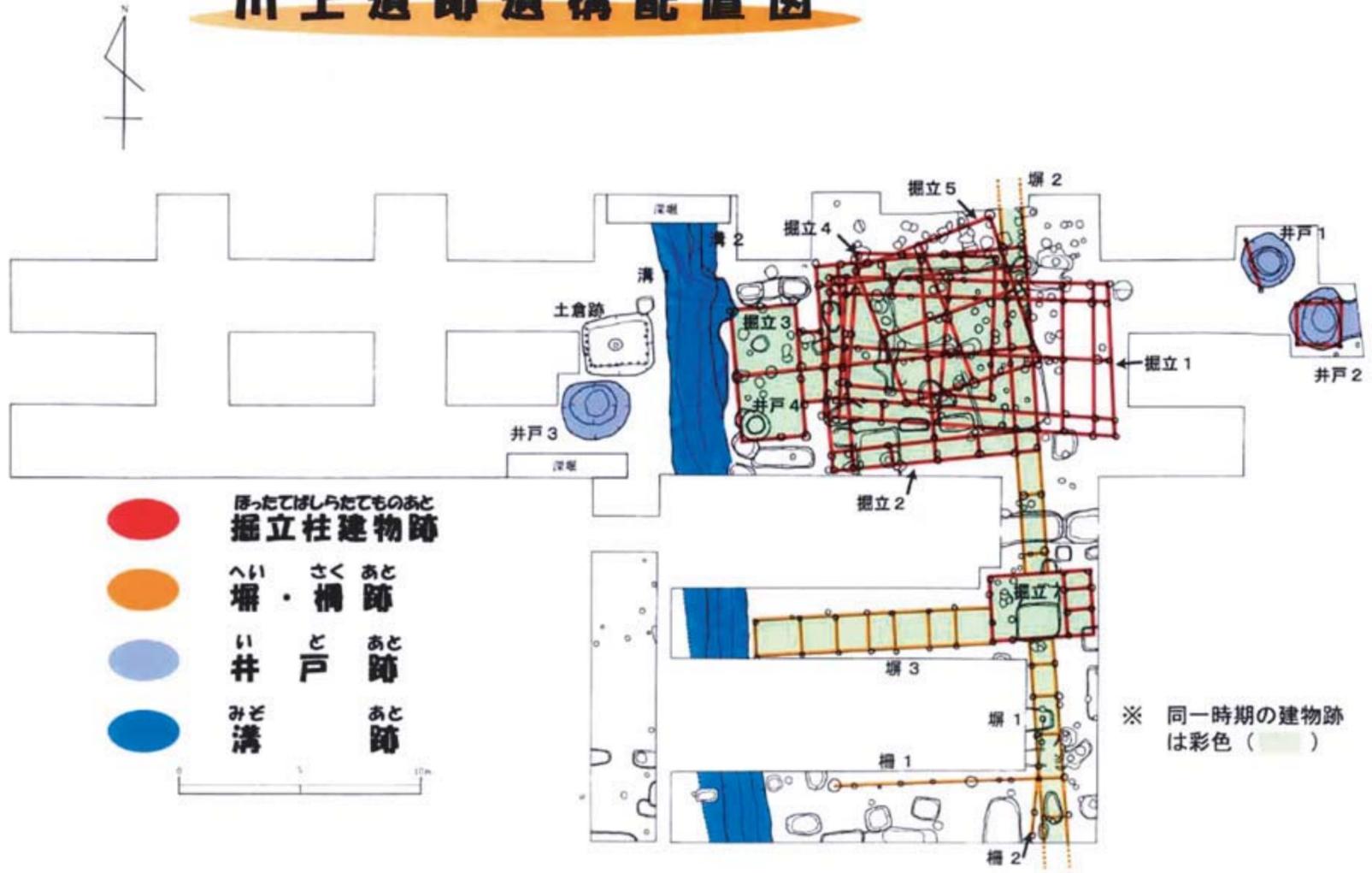


かりのみや  
お仮宮と五方の辻碑

# 川上遺跡

那智神社お仮宮かりのみやの南側約200mに  
位置し、付近は旧東街道沿いの那智神  
社の門前宿と推定されている場所に  
あたります。発掘調査で鎌倉時代後半  
～室町時代のものが発見され、特に溝  
や塀で区切られた場所に建てられた  
建物は、那智神社に係る宿坊跡しゅくぼうと  
考えられています。常滑焼とこなめやきや渥美焼あつみやきと  
言った東海産の陶器や、地元産の陶器  
(甕かめ・壺つぼ・擂鉢すりばち)のほか、中国産の青  
磁なども見つかっています。

かわかみ いせき いこうはいちず  
川上遺跡遺構配置図



川上遺跡遺構配置図



調査区の様子



出土した青磁

ごほう　　つじひ  
五方の辻碑

熊野那智神社参道の入口に建つお

かりのみや

仮宮の鳥居下にある自然石の道標で

す。古来から市西部丘陵沿いを南北に

かたわ

走る街道の傍らにあり、5つの古道が

合流・分岐する交通の要所にあたるこ

とから五方の辻と言われるものです。

県内の道標でも珍しい5面体のもの

で、東面の上部には、道中の安全を祈

えんめいじ　ぞうぼさつ　せんこく

る延命地藏菩薩が線刻されています。

【東面（正面）】

上部：延命地藏線刻

左側：享保二年丁酉（1717）

右側：三月十七日 吉田村

下部：「せんたい、中田町、ゆり上、  
ました町みち」

※仙台城下では、町人や足輕の住むところを町  
と呼びます。

【北面】

「くまのしんくう、ほんくうみち」

【北西面】

「なち山これより十六丁、つぼぬまみ  
ち」

【西面（背面）】

「すかう町、川さき町、村田町みち」

【南面】

「いまくまの、たうそ神みち」



五方の辻碑

## コラム 名取川と歌枕

仙台市との境を流れる名取川は、古くから歌枕として都があった京都にも名が知られた名所めいしょでした。名取の「名を取る」が浮き名（身に覚えのないうわさ）を流すという意味に使われ、恋の歌などによく詠よまれたのです。名取川から産出する埋れ木うも

も歌枕に詠まれ、合わせると50首しゅ以上の歌が残されています。

ここではその中の二首を紹介します。

## 名取川の歌の例 『古今和歌集』

みちのくに ありといふなる 名取川

なき名とりては 苦しかりけり (壬生忠峯)

「陸奥に名取川というものがあると聞くが、名声ならよいが「なき名」で評判をとっては苦痛である」という内容の歌。

み ぶ ただみね  
壬生忠峯は、古今和歌集の撰者の一人。

「なき名」：事実では無い恋のうわさのこと。

名取川 瀬々の埋木 あらはれば

いかにせむとか あひみそめけむ (読み人しらず)

名取川を「名を取る」(＝評判になる)と掛けて、その河瀬の埋もれ木が<sup>あら</sup>露わになるように、二人の間が世間に知れたら一体どうするつもりで、自分たちは親しくなったのだろうか」という歌。

この歌は二人の恋がこれからどうなってしまおうのだろうかという不安を詠ったもの。

「いかにせむ」：どうしたらよいのか分からない。

「あひ見そめけむ」：好きになってしまった。



山、平地、川の風景

## 道ぞいの祈りの場

古くから祈りや願いの場として各地に神社やお寺などが造られました。高館地区には熊野三社くまのさんしゃだけでなく、ほかに今熊野神社いまくまのじんしゃ、川上観音堂かわかみかんのんどう、秀麓斎しゅうろくさいなどが街道沿いに建立されています。川上観音堂と秀麓斎は、那智神社なちじんしゃの北側にある観音堂とともに奥州三十三観音おうしゅうさんじゅうさんかんのんの札所ふだしょになって

おり、多くの巡礼者が訪れています。

また道ばたなどでもいろいろな石碑を見ることができます。板碑いたびや馬頭観音ばとうかんのんのような供養碑くようひ、山の神のような信仰の碑などです。



道ばたの石碑群  
(南東から)



秀麓齋  
(東から)

# 今熊野神社

社伝によれば、川上邑の長がくまのさんしょごん熊野三所権げん現を信仰し、当地へ建立を願う女やまごもの山籠りが百日余りに及んだことを伊達政宗だ て まさむねに陳情し、その命でけいちょう慶長五年(1600年)4月に建立されたと言われています。地元では、赤坂山と呼び別名「赤坂神社」とも言われています。

神社に伝わる今熊野神社かぐら付属神楽は、仙おいでもりはちまんじんじゃ台市茂庭の生出森八幡神社から伝承された、熊野堂神楽の流れを汲むいわと岩戸神楽で、毎年4月第三日曜日の神社例大祭に神楽殿ほうのうで奉納されます。



今熊野神社  
(東から)

こんごうじ

# 金剛寺観音堂（川上観音堂）

所在地：高館川上字八反 56

高館川上生活センター脇にあるお堂が、  
金剛寺観音堂です。金剛寺は、観音堂から  
南西約500m地点にあります。無住とな  
り現在は熊野新宮寺の管理となっており、  
詳しい由緒などは伝えがなく不明です。本  
尊には十一面観音を祀り、奥州三十三観音  
霊場の第3番札所となっています。



川上観音堂  
(東から)

## 語りつがれてきた物語

口から耳へ、耳から口へと語り伝えられてきた伝説や昔話が高館地区にも数多く残されています。その中に『幾世・小佐治の悲恋物語』があります。この悲しい物語に登場する幾世と小佐治の供養碑が川上の道ばた（東街道ぞい）に向かい合って立てられています。今は読めませんが、そ

の碑には永和二（1376）年と刻まれていたと伝えられます。また物語の桑島長者はこの碑の西方にある桑島館（桑島館跡）に住んでいたとも言われています。

今から600年以上前に、本当にあったできごとなののでしょうか。

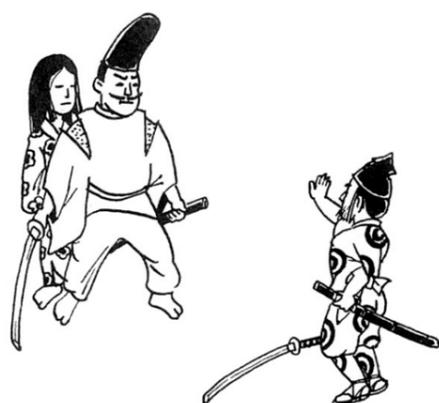


桑島館あと  
(東から)

# 幾世、小佐治の悲恋物語

おかしむかし。高館川上(高館浄水場付近)に、桑島長者が住んでいました。

娘幾世が十七歳のときです。京都公家のせがれ小佐治は、東街道を通り北海道の松前までいく途中に桑島長者に一夜の宿をこいました。その夜、娘幾世を目当てに、膳所大内蔵武秀という義賊が強盗に入ってきたそうです。ちやうどよく、小佐治が泊っていたので、強盗を追い払いました。膳所大内蔵武秀は手傷を負い、逃げのびる途中植松(館腰)で亡くなりました。現在は供養碑が建てられ、旧暦十一月二十六日には部落の人たちによって供養されています。



小佐治が旅立った後に、幾世は小佐治のお茶を飲んで妊娠し、子供を産み育てました。それでも、小佐治を慕う心は強く、恋に悩んだ末、増田川に身を投げて死んでしまいました。帰り道に、小佐治は桑島長者をたずね一夜の宿をお願いし、自分の子かどうかわかると確かめるため、扇であおいでみたところ泡のように消え去ってしまいました。幾世を亡くした小佐治も悲しみのあまり死んでしまいました。

現在、二人の墓は川上生活センターの近く、県道(東街道)をはさみ、西(幾世)東(小佐治)に分かれて建っています。幾世と小佐治の悲恋の物語です。

この話から「おなご(女)はのどが乾いても、人が飲んだお茶を飲むもんでねえ、飲むと妊娠する。」と言い伝えられています。

(名取市観光協会『なとりむかしばなし』より)



幾世・小佐治供養碑

# 発掘調査速報展

## 最新の発掘調査成果

名取市内には、今から約2万年前頃（後期旧石器時代）～150年前頃（江戸時代）にかけての、200カ所にもおよぶ遺跡いせきがあります。

遺跡は、郷土の歴史を知るうえで欠かせないものです。一度こわれてしまうと

元に戻すことができないため、工事などをおこなう前に地下の遺跡を調べ、記録をのこして後世こうせいへ伝えていく必要があります。そのための作業が発掘調査です。

ここでは、昨年から今年にかけて実施した最新の発掘調査の成果をご紹介します。

# 名取市



発掘調査速報で取り上げた遺跡

## ～賽さいの窪くぼ古墳群～

所在地：愛島笠島字西小泉・北台・南台

愛島塩手字十石上

愛島笠島の丘陵部には、土をまるく盛った高まりがあちこちにみられます。これは古墳時代の中期から後期(5～6世紀頃)につくられたお墓です。直径20m前後・高さ2m前後の大きさで、約30基を確

認しています。

昨年調査では、縄文時代に動物を捕まえるために掘った落とし穴や、平安時代のたてあなじゅうきょあと 竪穴住居跡、中世のほったてばしらたてもものあと 掘立柱建物跡などが見つかりました。古墳群とは異なる時代のものですが、古墳をつくった人のご先祖様や子孫が関わっているかもしれませんね。



賽ノ窪古墳群の発掘調査区

発掘を終えて撮影



平安時代の竪穴住居跡  
この住居は落とし穴（写真右）を壊してつくられています。



左 縄文時代の落とし穴 右 落とし穴に溜まった土の層

## ほんそん ～本村遺跡～

所在地：増田字後島・下増田字丁地前

本村遺跡は、JR 名取駅から東南約 2～3 km のところにあります。遺跡の範囲は東西約 800 m・南北約 300 m で、旧名取川流路の南岸に発達した自然堤防<sup>しぜんていぼう</sup>上に位置します。過去の調査では、平安時代の井戸跡や溝跡、弥生時代後期から

古墳時代前期の遺物<sup>いぶつ</sup>などがみつかっています。

今年の調査では、古墳時代から古代の竪穴住居跡や土器が見つかりました。当時は住宅街だったのででしょうか。

また、地震などで地下の砂が噴き出したあと（噴砂<sup>ふんさ</sup>）もみつかっています。



### 本村遺跡の発掘調査区

発掘では、調査をおこなう範囲（調査区）を設定します。



### 埋設土器

穴のなかに埋まっていた土器：展示中



### 噴砂

地震などで地下の砂が噴き出したあと